

<研究報告>

幼児教育における音楽と動きを融合した表現活動に関する考察

—2011年～2020年の研究動向を中心として—

桐原 礼 信州大学学術研究院教育学系
渡辺敏明 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：幼児教育，領域「表現」，音楽表現，身体表現，リトミック

1. 研究の背景と目的

平成29年に「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」，ならびに，認定こども園の「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂が行われ，平成30年4月より施行された。新しい「幼稚園教育要領」においては，平成28年12月の中央教育審議会答申をふまえ，幼児教育において育みたい資質・能力の3つの柱「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力，人間性等」が示された。この3つの力は，それぞれ個別に学んでいくものではなく，「遊びを通して」育成していくこととされている。また，幼児教育から小学校教育へのスムーズな接続を実現するために，異校種間における連携を十分に図っていくことが重要視されている。このために，「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の10項目（「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり，生命尊重」「数量や図形，標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」）が明確化された。また，特別な配慮を必要とする幼児への指導として，障害のある幼児や日本語の習得に困難のある幼児等について，幼児の実態に応じた支援計画や指導内容の工夫をしていくことが重要であるとされている。本研究のテーマとしている幼児の身体表現活動は，「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の育成や，特別な配慮を必要とする児童への指導にも貢献し得るものであると考える。

また，幼稚園教育においては5つの領域（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）があり，本研究で着目している領域「表現」には，「音楽表現」「造形表現」「身体表現」が含まれている。実際には，これらを単独で実施するのではなく，遊びの中で融合させた取り組みを工夫していくことが必要であると考えられる。本研究のテーマとしている幼児の身体表現活動は，主として，運動などの身体活動の分野で行われてきているが，遊び歌やリズム遊びなど，音楽的な活動に位置づけられるものもある。また，「音楽表現」において身体表現を取り入れた活動は，「造形表現」「身体表現」とも密接な関わりを持っており，さらには，他領域の活動とも関連づけることができる。しかしながら，「音楽表現」を視点とした場合の身体表現活動のねらいや内容を明確にしていくことによって，幼児の資質・能力の育成に

向けた指導計画を立てたり、具体的な幼児の学びをイメージしたりすることができるであろう。

本研究においては、幼児教育における音楽と動きを融合した表現活動に関する近年の研究動向について検討し、その特徴や今後の課題について導き出すことを目的とした。

2. 調査の対象と方法

幼児教育における音楽表現活動、その中でも身体表現活動に関連した研究として、日本における過去10年間（2011年～2020年）の論文および報告書を対象とした。キーワードを「幼児、音楽、身体表現、身体の動き」として、検索・収集した。この際、運動を主とした「身体表現」、ならびに、総合表現である「音楽劇」をテーマとしたものを除くこととした。「音楽表現」に関連した身体表現の論文および報告において、全文を入手できた計61本を具体的に検討することとした。これらの内容にもとづき、①音楽と動きを融合した表現活動に関する理論的研究（16本）、②幼児の発達や特別支援教育に関する研究（17本）、③指導法および指導内容に関する実践的研究（28本）に分類した。このカテゴリーそれぞれについて、研究内容の概要および特徴を挙げながら、近年の動向について検討することとした。

3. 過去10年間における研究の動向

3.1 音楽と動きを融合した表現活動に関する理論的研究

身体表現を導入した音楽教育法として広く知られている、リトミックに関する研究が多くみられた。リトミックは、スイスの音楽教育家エミール・ジャック＝ダルクローズ（Jaques Dalcroze, Émile ; 1865-1950）が20世紀初頭に創始した教育法である。神原（2014）は、日本におけるリトミックの研究動向について検討し、これまでの研究について、教育理念に関する思想や方法論の研究、心理学的研究や学習プロセスに関する研究、幼児および保育者を対象とした実践的研究、保育者養成カリキュラムへの導入、学校音楽科授業や音楽療法への応用、のように整理した。今後は、幼児から高齢者までを対象として、年齢や能力に応じた細やかな指導を実施していくことが必要となり、そのためにも、指導者の音楽性や創造性を高めていくことが重要であると指摘している。

リトミックの理論構築の背景や教育法の特徴を明らかにしようとする研究においては、同時代の教育学者や哲学者などの思想や理論が影響していると考えられている。古谷（2017）は、リトミックに関連した研究は実践研究に偏る傾向がみられるが、ダルクローズの根本理念や教育思想を再認識しながら今後の指導に活かしていくことも重要であると指摘している（p.20）。そこで、ダルクローズの著書の中で、特に哲学者ミシェル・エケム・ド・モンテーニュ（Michel Eyquem de Montaigne ; 1533-1592）の記述の引用部分を取り上げて検討した。その結果、幼児の早期教育導入の根拠などをモンテーニュの教育論に求めており、モンテーニュの教育思想はリトミックの構築過程における支柱の一つであったことを明らかにした。また、ダルクローズのリトミック法においては、子どもの音楽教育にはまずユー

リズムックス（リトミック）と呼ばれるリズム運動を導入することとしているが、「音楽において、最も強烈に感覚に訴え、生命に最も密接に結びつく要素というのはリズムであり、動きだからである」というダルクローズの言葉を引用し（p.16）、リズムと動きが子どもの音楽教育の第一段階であることを示している。

同様にダルクローズの著書を検討した入江（2017）は、リトミックを身体運動という側面から捉え、体育学者ジョルジュ・エベール（Hébert, Georges ; 1875-1957）の記述を取り上げている。ダルクローズがエベールの体操と他の多くの体操とを区別した根拠を見出し、ダルクローズの体操観について検討した。ダルクローズは、同時代のエベールの「自然的方法」、すなわち、自然の動きを基本としてさまざまな速度と強さで行われる連続的な身体運動により、リトミックのリズムの的確な身体的実行力を養うことができると考えた。ダルクローズがエベールの理論を評価し、リトミックの身体運動の方法への確信を得たと述べている。

リトミックの最も基本的な理念である「リズム」に特に着目した杉山（2018）は、それが当時のドイツ芸術教育の分野にて必要とされていた背景について検討した。20世紀初頭ドイツにて開催された芸術教育会議においては、音楽と体操の根底に「リズム」という共通点があることに注目が向けられ、その後のドイツの「表現舞踊」の概念をもたらしたという。同時期にダルクローズがリズム運動を通して音楽と身体を融合しようとしたことと通ずるところがあり、「これらの根底にはいつも〈リズム〉がある」（p.61）と述べている。同時期の舞踊や体操によるリズム運動ではなく、ダルクローズは音楽を主としたリズム教育によって身体のあらゆる神経系を呼び覚まそうとしており、当時の新教育の指針であった人間の原点に立ち返らせようとする、新たな人間教育を生み出したことに功績が認められると指摘した。

ダルクローズがリトミック法を考案したスイス・ジュネーヴ州の取り組みについて、今（2018）は、4～5歳の幼児部を含む公立小学校の事例を検討している。ここでは、科目として「音楽」とともに「リトミック」が教科として並存しており、音楽室とは別にリトミック室が設置されている、リトミック専科教員が指導にあたる、特に低学年時においてリトミックの時間を重視している、などの特徴があるという。事例の検討を通して、リトミックの学習効果として、①発見の力をつけること、②音楽と身体の動きの関係を知ること、③記憶力を伸ばすこと、④創造、即興の力をつけること、⑤社会性を養うこと、という5点を提示した（p.9）。リトミックは、音楽の可能性を拓げるだけでなく、身体や言語表現にも大きな影響を与えていると述べている。

またシュタイナー教育理論においても、音楽と身体表現が密接に関連しているとされている。ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner ; 1861-1925）は、20世紀初頭にオーストリアやドイツで活躍した哲学者・思想家であり、自身が提唱した教育思想はシュタイナー教育と呼ばれている。広瀬（2018）は、シュタイナー幼稚園で行われている身体表現活動「ライゲン」を支えるシュタイナー教育理論について検討した。輪になって歌い踊って体を動かす

「ライゲン」においては、広瀬（2018）は「幼児のうちに、自分の意志でその身ぶり、動作を模倣しようとする欲求がわき上がってくる」（p.8）とシュタイナーの考えにもとづいて述べ、指導者の模倣を通して子どもたちが想像したことを表現することを重要視している。その際、指導者の音楽的なリズムに満ちた身体活動が必要とされるという。またライゲンは、幼児の身体組織および器官を形成し身体活動を活発に促すことや、言語能力の育成に寄与することを示した。

その他の海外における状況について、イタリア北部に位置するレッジョ・エミリア市におけるレッジョ・エミリア教育について、高野（2017）は、市内の保育形態の異なる4つの幼児教育施設の芸術教育について視察し、活動内容における身体表現性について検討している。多くの事例において、美術と音楽を分けることなく活動を展開しており、子どもたちの身体表現を促す工夫が施されていたという。保育者が動きを通してコミュニケーションを取ったり、プロジェクトで光や影を映した環境を構成することで、場と身体が対話できる空間を設定したりしながら、子どもたちの身体意識を高めようとしている状況について報告した。

これらの研究において、身体表現を導入した音楽教育法に関する理念が20世紀初頭の教育哲学にもとづいていることが明らかにされている。この中で、身体表現を通じた音楽的な概念の獲得、コミュニケーション能力や言語能力の向上、身体活動を促す、などの効果があることが示されている。このような幼児教育における教育的意義について確認していくことは、幼児を対象とした実践を展開していく上で重要であると考えられる。

3.2 幼児の発達や特別支援教育に関する研究

幼児の発達については、幼児の音楽的な発達や動きの変容、特別支援教育に関する研究がみられた。

音楽的な発達に関する研究として、梶間他（2020）は、手遊び・からだ遊び・わらべうたに関する保育者へのアンケートを実施し、この3つの遊びが主に0～1歳児の頻度が高いこと、遊び歌を介して保育者が一人一人の乳幼児に向き合うような関わりを重視していることを導き出した。また、幼児対象の曲集を分析した結果、2018年度施行の幼稚園教育要領及び保育所保育指針に記される「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、この3つの遊びは「思考・判断・表現」「自立心」「ふれあい・コミュニケーション」に相当するとしている。このような、身体の動きを伴う音楽遊びによって、幼児の発達が促される可能性があることを示している。

幼児の手遊びやからだ遊びに関連して、小池・安藤（2020）は、音楽的コミュニケーションの概念について検討している。手遊び等は、手指の動きを模倣し合うだけでなく、音楽に合わせて身体を動かしたり、身体をふれあわせたりするという特徴がある。こうした遊びにおいて、身体感覚の認知や他者との共同性を高めたり、音楽と身体の同期や聴覚の発達を促したりしながら、乳幼児の音楽性を引き出す効果があるとしている。手遊びやからだ遊びを

介した乳幼児と保育者の関わりについて、乳幼児の音楽的発達および言語や身体発達について図式化し、乳幼児の音楽的コミュニケーションの概念を提示した。

また、幼児の音楽的表現における身体的な動きの動作解析を実施した佐野（2019 a）の研究においては、幼児期における音楽の諸要素に関する認識が身体的な動きの要素の変化に表われていることを報告しており、継続的な研究を通して、身体の動きを伴う音楽的表現における幼児の発達について解明しようとしている。幼児の音楽的表現の発達過程における身体的な動き（佐野，2019b）、リズム活動を中心とした身体的な動きの要素の変容（佐野，2018）など、佐野は自身の開発した幼児のための音楽経験プログラムを継続的に実施・検証している。

特別支援教育において、身体の動きを伴う音楽的な活動を有効的に取り入れようとする研究として、松井（2016）は、自閉症スペクトラムの4歳の男児が在籍する、インクルーシブ保育におけるリトミック活動について検討した。この男児にとっては、全員で停止や静寂を楽しむものや、子どもたちが想像の中に入り込み集中して活動するものは困難であったものの、行進曲のような拍感の明確な音楽の時には音楽に合わせて歩くような姿がみられたことを報告した。

また、丹羽他（2018）は、インクルーシブ保育における音楽表現活動について検討している。自閉症スペクトラムなどの発達障害と診断されている5歳児2名を研究対象とし、音楽療法士がそのクラス集団に1年間にわたり音楽表現活動を実施した。この際、身体表現活動としては、空間認知・強弱・身体動作などを目的として、「身体表情表現」（ボディランゲージなど）や「集中力を養う身体リズムあそび」が実践されている。対象とした児童2名は、回を重ねるごとに他児と関わりながら、活動に関心を持つようになったという。音楽表現活動を通して、障害の有無に関係なく集団の中で社会性を育むことができる可能性を示した。

丹羽他（2018）以外の研究として、自閉症スペクトラム児の行動変化（古賀他 2017）、ADHD 傾向児童の行動変化（古賀他，2018）、発達遅延児の身体の動きを通じた創造的音楽表現（丹羽他，2020）など、身体表現と音楽を関連づけた活動の有効性が検証されている。

このような研究においては、幼児の動作に音楽的な発達と密接な関わりがあることや、身体の動きを伴う音楽的な活動が、社会性や創造性の伸長に有効である可能性が示されている。こうした研究は未だ数が少ないため、今後、研究手法の確立とともに、研究の蓄積が必要とされる分野であると考えられる。

3.3 指導法および指導内容に関する実践的研究

身体の動きを伴う音楽的な活動の実践報告や指導法検討など、実践的な研究の数が最も多く確認された。ここでは、リトミックを始めとする表現活動の指導法や指導内容の検討、保育者の指導力向上に関わる実践的研究、幼稚園教諭・保育士養成課程の授業内容の検証などがみられる。

子どもの発達段階をふまえたリトミック指導のあり方について、宮崎（2019）は、異なる年齢の子どもたちを対象とした場合の課題と方策について検討している。音楽教室で1～3歳児を対象に行ったレッスンと、保育園の3～5歳の混合クラスの指導事例を対象とした。最年少児の行動が最年長児を「赤ちゃん返り」させたり、最年長児の行動が最年少児の行動に影響を及ぼしたりすることもある。異なる年齢児へのリトミック指導は、指導目的を定めることが非常に難しいと述べている。このため、指導者自身が柔軟に対応することを基本としながら、各年齢の特徴やリトミックにおける指導指針にもとづいた指導目標を定めておくことが必要であると指摘している。

また中根（2015）は、子どもの音楽的表現力に関連する環境として、特に重要なのが保育者の音楽的表現力であると述べている。そこで、保育者の表現力の成長による子どもの音楽的表現力への影響について検討した。保育者18名にリトミック研修を実施した後に、その保育園の子どもたちの表現の変容を分析したところ、子どもたちの表現力およびリズム感の向上がみられたことを報告した。この際、保育者の表情が豊かになったことも、子どもの音楽的表現に影響があったと述べている。今後、保育者の表現力の変容が及ぼす子どもへの影響について研究していく必要性を指摘している。

小竹他（2020）は、保育施設における1～3歳児のリトミック実践から、子どもの学びについて検討している。ここでは、本来のリトミックの特徴である「リズム感」よりも、子どもの「表現」を重視し、表現力や想像力のような、子どもたちが豊かに生きていくために必要となる能力の部分に重点を置いてリトミックが行われていたという。保育所とリトミック教室との違いとして、指導する側のねらいとする子どもの姿が異なるものであることを指摘している。

幼稚園教諭・保育士養成課程の授業においては、リトミックを導入しながら音楽理論や即興演奏について学んだり、遊び歌やからだ遊びなどを実践したりする場面が設定されている。このような、授業内容の報告および学生アンケートなどを通じた授業改善に関する研究が多くみられる。授業改善について、例えば、小倉（2019）は、授業計画におけるリトミック課題について再検討するために、学生にインタビューを実施し、課題における文言や指示方法の改善を図っている。

学生の音楽的な能力に関する研究として、岡部（2013）は、保育者を志す学生の音楽的能力の育成に、リトミック・アプローチによる身体表現の実践が役立つものであるかどうか検討した。ソルフェージュ力には身体表現の経験が関わっていると考え、授業において、あるグループにはリズム・音程・フレーズ・ハーモニーを身体表現させた。学生の即興的な歌の創作活動を通して、身体表現活動と創作作品の関連について検討したところ、身体表現やリズム運動の体験があるグループの学生には、拍子感、フレーズ感、形式などが意識化され、それらが創作メロディーにあらわれた可能性があることを示した。保育者としての音楽的能力に対する自覚や、伝えたいとする意欲の高まりなどの点からも、身体表現を通して音楽を学ぶことの有効性が確認されたと述べている。

また長島（2015）は、保育士養成課程学生の音楽鑑賞教育における身体表現活動のあり方について検討するために、授業後の振り返りシートにおける自由記述を分析している。楽曲の鑑賞後にその楽曲のイメージを身体表現させたところ、音楽から抱いたイメージを言語化する過程においては、楽曲の細部にも意識が向けられたという。しかしながら、音楽から受けたイメージを身体表現によって表現するという段階では、イメージを動きにしていく過程に学生の困難が感じられ、体を動かすことを目的とする活動になってしまったことを報告している。皆が受け入れやすい身体表現活動を用いて、活動内容を工夫することが重要であると述べている。

こうした研究においては、より効果的な活動を実施するために、指導内容や音楽的な能力について検証している。指導者の音楽的な表現力や指導力は、幼児に大きな影響力をもたらすため、指導者研修や幼稚園教諭・保育士養成課程の授業などの内容を検証しながら、一層、指導者の能力を向上させていくことが重要であると考えられる。

4. 総合的考察

本研究においては、領域「表現」の「音楽表現」の中で、特に、身体の動きを伴う音楽的な活動に関わる、近年の研究動向について検討した。幼児の表現において音楽と動きは密接なものであり、音楽的な活動において身体表現をより積極的に取り入れることによって、音楽的な概念を形成させたり、身体活動や言語活動を促したり、表現力や他者とのコミュニケーション能力を向上させたりするなどの教育的意義を確認することができた。

音楽と動きを融合させた活動について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目に照らしてみると、特に「健康な心と体」（幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる）、「協同性」（友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる）、「豊かな感性と表現（心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる）」という項目に直結していると考えられる。

こうした「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に向けて幼児教育を実施していくためには、幼児の発達と学びの連続性に着目する必要がある。本研究において近年の研究動向について検討したところ、活動内容の提案などの実践的な研究の割合が高く、幼児の発達および学びの連続性については、未だ解明されていない部分が多いと考えられる。音楽に合わせて身体を動かす活動を実施することのみを目的とするのではなく、こうした活動が幼児の発達のどのような側面の育成に寄与していくのか、教育哲学の視点や実証的研究によって、より明確化していくことが必要であると考えられる。そのために、今後も音楽と身体の動きを融合した活動の理念について多方面から明らかにするとともに、幼児の発達に関するデータ

を蓄積していくことが必要であろう。また、子どもたちの活動をより活発化させたり、有意義なものにしたりするためには、保育士および養成課程学生の指導力や表現力の向上が求められる。今後は、子どもの発達や学びと共に、保育者の表現や指導力などについて、より詳細に明らかにされていくことが望まれる。

引用文献

- 入江眞理（2017）．リトミックにおける身体運動の意義（4）：ジョルジュ・エベールに関する記述を手がかりに．*環境と経営：静岡産業大学論集*, 23, 2, 109-119.
- 岡部裕美（2013）．音楽基礎能力と身体表現の相関：即興によるうた作りから．*千葉大学教育学部研究紀要*, 61, 65-75.
- 小倉隆一郎（2019）．リトミック演習課題の検討と改善：新カリキュラム「幼児と表現」を踏まえて．*文教大学教育学部紀要*, 53, 47-56.
- 梶間奈保・小池美知子・居原田洋子（2020）．乳幼児の音楽的コミュニケーション概念の開発：音楽的発達に関する先行研究を踏まえた手遊び研究の意義．*島根県立大学松江キャンパス研究紀要*, 59, 33-38.
- 神原雅之（2014）．幼児と音楽：リトミックに関する研究動向を中心に．*音楽教育学*, 44, 1, 40-47.
- 小池美知子・安藤千秋（2020）．幼児の発達を促す年齢に応じた手遊び・からだ遊びの検討：既存の手遊び・からだ遊び及び保育現場の意識に着目して．*松山東雲女子大学人文科学部紀要*, 29, 31-41.
- 古賀弘之・丹羽裕紀子・小田紀子（2017）．保育園での音楽表現活動：自閉症スペクトラム児Aの行動変化．*名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究*, 27, 81-89.
- 古賀弘之・丹羽裕紀子・小田紀子（2018）．保育園での音楽表現活動(2)ADHD傾向を伴うB児の行動変化．*名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究*, 29, 17-25.
- 小竹沙織・馬場訓子・高橋慧・渡邊祐三・高橋敏之（2020）．子どもの主体的な身体表現を引き出すリトミックの保育実践研究（第一報）：保育施設における1・2・3歳児学級の事例を中心にして．*岡山大学教師教育開発センター紀要*, 10, 183-197.
- 今由佳里（2018）．ジュネーヴ州の音楽教育に関する一考察：公立幼稚園および公立小学校における「リトミック」授業．*九州地区国立大学教育系・文系研究論文集*, 5, 2, 1-10.
- 佐野美奈（2018）．幼稚園児の音楽的表現における身体的な動きの要素の変容：リズムの活動を中心とした音楽的表現の定量的分析を通して．*幼年教育研究年報*, 40, 33-40.
- 佐野美奈（2019a）．保育園と幼稚園の幼児の音楽的表現における身体的な動きの要素の変化に関する特徴：モーション・キャプチャーを用いたMEBプログラムの実践過程の定量的分析をとおして．*大阪樟蔭女子大学研究紀要*, 9, 211-222.
- 佐野美奈（2019b）．幼児期の音楽的表現における動きの要素の特徴：5歳児の身体的な動

幼児教育における音楽と動きを融合した表現活動に関する考察

- きと音楽的諸要素の認識に関する定量的分析を中心に. *大阪樟蔭女子大学研究紀要*, 9, 201-210.
- 杉山真佑美 (2018). エミール・ジャック＝ダルクローズのリトミックに関する一考察: リズム運動と人間教育の関係性に着目して. *学習院大学ドイツ文学会研究論集*, 22, 55-72.
- 高野牧子 (2017). レッジョ・エミリアの幼児教育における身体表現性. *山梨県立大学人間福祉学部紀要*, 12, 83-94.
- 丹羽裕紀子・古賀弘之・小田紀子 (2018). インクルーシブ保育における音楽表現. *名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究*, 30, 35-44.
- 丹羽裕紀子・古賀弘之・小田紀子 (2020). 発達遅滞 A 児の創造的音楽表現. *名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究*, 33, 211-221.
- 中根佳江 (2015). 保育者の表現力の変容が及ぼす子どもの音楽的表現力への影響: リトミックを通しての考察. *大阪総合保育大学紀要*, 9, 83-106.
- 長島 礼 (2015). 音楽鑑賞教育における「体を動かす活動」のあり方に関する一考察: 実践を通して見えてくる学習効果と課題. *教育学論究*, 7, 105-109.
- 広瀬綾子 (2018). シュタイナー幼稚園における身体表現活動: ライゲンを中心に. *子ども未来学研究*, 12, 3-16.
- 古谷和子 (2017). ジャック・ダルクローズとモンテーニュの子ども教育観に関する比較研究. *小池学園研究紀要*, 15, 11-21.
- 松井いずみ (2016). インクルーシブ保育におけるリトミック活動の観察を通して. *駒沢女子短期大学研究紀要*, 49, 11-20.
- 宮崎真利子 (2019). 異年齢児のリトミック指導に関する一考察. *埼玉学園大学紀要*, 人間学部篇, 19, 155-162.

〈付記〉

本研究は, 日本学術振興会科学研究費 (課題番号: 20K02880) の支援を受けて行われた。

(2020年11月27日 受付)
(2021年 2月22日 受理)